

## ボランティアスタッフの皆さん、ありがとう！

今回の B&G 体験クルーズには 12 名のボランティアが参加し、各組の補助リーダーやさまざまな運営チームのスタッフとして活躍してくださいました。彼らを代表して、3 名のボランティアの方々がクルーズの感想を語ってくれましたので、ご紹介します。

### 船旅だからこそ、短い旅の間に熱い友情が芽生えるのだと思います。

片山 亮（補助リーダー / 東京海洋大学航海科 3 年生）

普段は、大学で小学生を対象にした海事普及会という部活を行っています。今回のクルーズは、部を担当する先生から紹介されたのですが、私は、船と海と、そして子供が大好きなので、思わず飛びつきました。クルーズに参加する子供たちは、船や海から学ぶこともたくさんありますが、なにより共同生活の体験が一番の財産になるはずです。そこを子供たちに分かってもらえるようなお手伝いができたら、きっと自分自身も成長できるのではないかと思います。



私は、航海実習などを通じて船に乗っていますから、船上生活においては何かをするにも 5 分前の、そのまた 5 分前集合という習慣を知っています。しかし、今回のクルーズは子供が対象ですから、そこまではしないだろうと思っていましたが、まったく私たちと同じように時間を守って行動することを貫いたので感動しました。この生活体験を通じて、子供たちは大きく成長したと思います。それは、最後に子供たちが見せてくれた表情からも伺え知ることができました。また、中学生の班長たちのリーダーシップにも驚かされました。班長といえども子供なのですが、責任感を持って他の子供たちをリードしてくれたことに、実に感動しました。

一方、私がさせていただいた補助リーダーは、子供たちと直に接する大事な仕事でした



が、最初のうちは、受け持った子供たち 1 人 1 人の性格や、彼らが何を考え何に悩んでいるのかといった内面を探ることに苦労しました。しかし、各部屋に行って子供たちといろいろ話すうちに、しだいに様子が分かるようになって打ち解けることができ、船酔いした子供を介抱するうちに頼られるようになっていきました。そして、小笠原

大学の実習服を着て、みんなとポーズ！

を離れる夜には「これで東京に帰ったら、リーダーとも会えなくなっちゃうね」と子供から言われて熱いものが込み上げ、航海最後の夜に行われたフェアウェルパーティーでは涙が止まらず、隣組のリーダーから励まされてしまいました。

熱い友情が芽生え、お互いを信頼し合えるようになるのは、船旅ならではのことだと思います。共同生活を通じ、同じ困難を乗り越えて結ばれた友情はとても固いものになるはずです。また機会があったら、クルーズに限らず B&G 財団のさまざまなイベントにご協力したいと思います。

### ■上級生が下級生の面倒をしっかりと見ている姿に感動しました。

齊藤雅恵（看護師 / 保健担当）

昨年のこのクルーズに、やはりボランティアで参加した職場の先輩から、「いい経験になるから行ってみては」と勧められたのが、今回参加させていただいたきっかけでした。私自身も、全国から 460 人もの子供たちが参加する船の旅はとても貴重な体験になると思いましたし、看護師の仕事が活かせるボランティアをしてみたかったので、参加することを決めました。また、忙しい仕事なので、夏休み以外はなかなか長い休暇を取ることができないのですが、婦長さんに相談したところ、「ぜひ行ってらっしゃい」と励まされました。



参加を決める際、昨年参加した先輩から船酔いの看護が大変だということを聞かされ、むしろそれをやり甲斐に感じたところもありましたが、船酔いの看護などは普段の仕事にありませんし、460 人もの子供たちが集まるわけですから、健康上のどんな問題が出てくるか分かりませんから、不安はありました。そのため、事前に船酔いに関する勉強と救急看護の復習を行い、職場から血圧計や聴診器などを借りて乗り込みました。

出港後まもなくしてから船酔いの子供が出始めましたが、私自身も乗り物酔いをするので、辛い気持ちはよく分かりました。しかし、研修するためのクルーズですから、「酔ったままで旅を終わらせたくない」と私も財団の考えと同じでしたので、寝ている子をなんとか起してプログラムに参加させる努力を続けました。病院の場合は具合が悪くなったら、すぐ安静にさせますから、少々勝手が違って苦労しましたが、旅が進むにつれて、自分の担当以外の子供たちからも気軽に声を掛けられるようになり、これはとても貴重な経験だと実感しました。

また、船上生活を送る子供たちにもいろいろ感心する面がありました。上級生は下級生の面倒をよく見てくれて、見た目に少々やる気がなさそうな子でも、しっかりと意見を言い、外れた行動もしていませんでした。いずれにせよ、出港前に想像していた子供たち



船酔いに苦しむ子供たちを介抱する斉藤さん  
も感動しました。

の姿とは、まるで違っていたのでとても驚き、そして感動しました。核家族化が進む現代ですが、このクルーズに参加した子供たちは、皆それぞれが力を合わせて団体生活を送っていたという印象を持ちました。

私は保健の担当ということで、なかなか子供たちと一緒にプログラムに参加することができなかったのですが、ホエールウォッチングだけは行かせていただき、クジラの姿を見ることができました。これは、クジラがくれたご褒美なのかもしれません（笑）。とて

### ■ 明るく素直な小笠原の子が、とても印象に残りました。

水野佐知子（教員 / 補助リーダー）

私自身、8年前にグアム・サイパンへのB&G体験クルーズに参加して、とても感動し、たくさんの友だちをつくることができましたので、同じ経験をいまの子供たちにもさせてあげることができたならうれしいと思って参加を決めました。

船上の生活では、仲間の輪になかなか入れない子のケアに苦労しました。私を介してでも、できるだけ輪の中に入れ、雰囲気に馴染んだ頃を見計らって私だけが輪の中からは抜け出そうと考えましたが、うまくいったケースもあれば、そうでないケースもあって、難しさを感じました。

もっとも、私は運営側のスタッフになるのかと思っていたのですが、直接的に子供たちと接することができる補助リーダーに選ばれて、とてもうれしく思いました。とにかく、このクルーズでは子供と関わることが実に楽しく、シュノーケリングなどでも子供と一緒に海に入ることができました。ただ、残念なことにホエールウォッチングは風が強くて中止になってしまい、子供たちも本当に残念そうでした。

そんななか、「今度は小笠原の誰々の家に泊まりに行けば、そのときクジラに会えるかもしれない」などと言って周囲を励ます子もいて、なにか気持ちがホッとしました。私が担当した組には小笠原から参加した子がいたのです。その子は、とてもやさしい性格の持ち主で、いつもグループの輪の中心にいましたから、きっとみんなに「今度はウチに遊びに



来いよ」と話していたのでしょう。復路で、その子がいなくなってからは、グループの雰囲気が変わってしまったほど存在感がありました。

いつも接している都会の子たちは、大人から何か言われたときに返事だけは素直にする



のですが、なかなか自分の意思を表に出そうとしないことがよくあります。その点、何でも自分の意見をしっかり話してくれる小笠原の子が、とても印象に残りました。

いずれにせよ、この体験クルーズは学校生活では得られない貴重な体験ができますから、たくさんの子供たちに勧めたいと思います。特に、船の上では集合時間などに厳しいことや大きな声で挨拶することなど、普段とは

違った生活を送るなかで子供たちは何か得るものを感じると思います。私としても、子供の叱り方や、注意の仕方、けじめのつけさせ方などに関して、勉強になった面がありました。